

## 正平南海地震 (1361) の津波に襲われた 徳島県美波町由岐, および高知県南国市前浜正興寺での浸水高

### Heights of the Tsunami of the 1361 Shohei Nankai Earthquake at Yuki, Tokushima prefecture and at Shokoji Temple in Nankoku City, Kochi prefecture

都司 嘉宣\*

#### 1. はじめに

紀伊水道から四国の南海域では、およそ 100 年～150 年の間隔で南海沖の巨大地震(以下南海地震と呼ぶ)が起きている。この海域ではフィリピン海プレートが南方から 1 年におよそ 5 センチメートルの速度で北上してきて、南海トラフの海溝軸のところで、西日本の国土を載せるユーラシアプレートの下に潜り込んでいる。南海地震は、この両プレートの境界面の滑りによって起きるプレート境界型地震である。南海地震には、発生年代の新しい方から列挙すれば、昭和 21 年 (1946) の昭和南海地震 (M8.0)、安政南海地震 (1854, M8.4)、宝永地震 (1707, M8.6) などを挙げることが出来る。その一つ前の慶長 9 年 12 月 (1605 年 2 月) の地震津波は徳島県、高知県、および九州の海岸に津波記録があり、地震の揺れの記録もある。この出来事を南海地震の一つと見なして、慶長南海地震 (1605) と呼ばれることが多いが、この津波をもたらした地震の震源が南海域に震源があったとする見解には否定的な証拠もいくつか挙げられている。明応 7 年 8 月 25 日 (ユリウス暦 1498 年 9 月 11 日) に明応東海地震があり、東海地方には、安政東海地震 (1854) や宝永地震 (1707) の津波を遙かに上回る規模の津波が襲ったことが知られている (都司ら 2013)。この東海地震とペアをなす明応南海地震があって、それは、明応東海地震の 71 日前の明応 7 年 6 月 11 日 (ユリウス

暦, 1498 年 7 月 10 日) に起きた地震であって、その揺れは京都や奈良の僧侶、貴族によって記録され、液状化痕跡が高知県四万十市具同あぞうの遺跡から発見され、さらに津波は、三河湾や三重県津市、或いは中国上海市付近でも記録されている。このことから 6 月 11 日の地震を明応南海地震と見なせるであろう (都司, 1999)。

今回本稿で取り上げるのはこの明応南海地震のさらにもう一つ前の、正平十六年六月二十四日 (ユリウス暦 1361 年 7 月 26 日, グレゴリオ暦では同年 8 月 3 日) 寅刻 (午前 4 時) 頃に起きた正平南海地震の津波である。この時代は南北朝時代で、「正平」は南朝の年号であるが、北朝年号では康安元年となる。この地震の揺れによる被害は、摂津四天王寺 (現在大阪市天王寺区) の金堂、奈良の唐招提寺、薬師寺、京都の東寺などの堂宇の破損倒壊が記録されている。『斑鳩嘉元記』によれば紀伊の湯の峯温泉の湧出が停止が記録されており、後年に起きた歴代の南海地震と同一の特徴を示すものである。

#### 2. 正平南海地震による津波の概況

正平南海地震 (1361) が南海沖の巨大地震の一つである以上、西日本に大きな津波が襲ったことは必然的である。土佐国以外の津波の状況について、おおよそ見ておくことにしよう。

正平南海地震の津波については軍記物の中世文献である『参考太平記』に、摂津難波浦 (現在大阪市) を襲った津波について次のよ

\*深田地質研究所

うに記載されている。

七月二十四日には、撰津国難波浦の澳数百町、半時許乾あがりて、無量の魚ども沙の上に息つきける程に、傍の浦の海人共、網を巻釣を捨て、我劣じと捨ける処に、又俄に大山の如くなる潮満来て、漫々たる海に成にければ、数百人の海人共、一人も生きて帰は無しけり。

この文の冒頭の七月は六月の誤であろう。

「澳」は「沖（おき）」の意味である。撰津難波浦（大阪）の海岸では約一時間潮が引いて、数百町（町は面積の単位、1町（歩）は約1ヘクタール、ここでは数百ヘクタール、おおよそ2平方キロの面積）の海底が露出し、たくさんの魚が砂の上に横たわっていた。難波浦はじめ近くの漁村の漁師たちは、漁網を巻き上げ、釣り竿も捨てて、われ先にそれらの魚を手づかみして拾い上げているうちに、急に山のような津波が襲ってきて、あっというまにまんまと水をたたえた海に戻ってしまったので数百人の漁師たちはみな津波に巻き込まれ一人も生きて帰ってきた者はなかった、というのである。津波は最初大きな「引き波」で始まっていることに注意したい。

大和（奈良県）法隆寺の記録である『斑鳩（いかるが）嘉元記』には、「又安居殿御所西浦マテシホミチテ其間ノ在家人民多以損失云々」と記されている。この文の「安居殿、西浦」と大阪での津波の高さについては、長尾（2013）の論文があり、大阪での津波浸水他頃差を3.3m以上4.65m以下と結論している。阿波国は、鳴門海峡と雪浦（徳島県美波町西由岐、東由岐）に津波記録がある。

鳴門海峡での津波の状況については、おなじ『参考太平記』に、次の記載がある。

阿波鳴戸俄潮去て陸と成る。

この文によると、鳴門海峡でも正平南海地震の津波によって、著しい引き潮が見られたことがわかる。上の文を文字通り解釈すれば、鳴門海峡が干上がって、四国と淡路島が地続きになった、と理解できるが、鳴門海峡の水深は217mもあるので（海上保安庁発行、海図による）、この理解が正しいことはあり得

ない。

雪浦（徳島県美波町西由岐、東由岐）に関しては『参考太平記』に、「中にも阿波の雪の湊と云浦には、俄に太山の如なる潮漲来て、在家一千七百余宇、悉く引塩に連て海底に沈しかば、家々に所有の僧俗男女、牛馬鶏犬、一も不残底の藻屑と成にけり」と記されている。雪浦にあった1700戸余りの民家が津波のためにすべて海底に沈んだ、と言うのである。図1は現在の徳島県美波町由岐（西由岐、東由岐）の2万5千分の一地図である。1700軒流失といえ、当時由岐にあったすべての家屋が流失したこととなろう。この図の太実線で囲んだ領域ではすべての家屋流失と見られる。きわめておおざっぱではあるが、ほぼ10mの等高線に一致する。由岐では津波浸水高さは10m前後がそれ以上であったことになる。

これは推定下限ではあっても、これだけでは津波高さの推定上限は押さえられない。津波浸水高は、10mか15mか、それとも20mかは、これだけでは決まらないのである。ところで、この地図には、東由岐に1ヶ所（長円寺）、西由岐に2ヶ所（般若寺、光願寺）の寺院がある。また、東由岐に2ヶ所、西由岐に1ヶ所の神社がある。ここで、次の仮定を置くことにしよう。すなわち、「新しく寺院の建物を創建、または移転・再建するときには、津波で浸水したと記憶される場所を敷地として選定されることはない」である。これは寺院の主要な役目が過去帳によって住民の先祖の事情を記録保持することにあるためほぼ自明の事実であると考えられる。人々が日常住んでいる家屋が津波や洪水など様々な災害で失われることがあっても、寺の過去帳が保存されている限り、その家系の先祖に関する死亡記録が失われることはない。この寺の存在意義そのものに関わる絶対的な役割が寺に託されているからである。国土地理院の電子国土Webでは、指定した点の標高は、「5mレーザ」でピンポイントで表示される。その信頼性は筆者にとって未知であるが、このシステムで、由岐の3ヶ所の寺院建物の標高を

測定してみた。その結果東由岐の長円寺の敷地の標高は海拔 11.1m，西由岐の般若寺は 12.8m，光願寺は 23.9m であった。これで見ると，正平地震の津波は 11m 以下であったと推測される。

以上のことから由岐の 1700 軒の家屋を流しさせた正平の地震津波の由岐での新種標高は 10m であったと推定されるのである。位置は，東由岐と西由岐の中間点として， $33^{\circ}46'23.45''\text{N}$ ， $134^{\circ}35'34.23''\text{E}$  とする。



図1 徳島県美波町由岐地区地図

なお，図1の右の方，東由岐大池の南の谷筋（イヤ谷）斜面に「康暦碑」が建っている。この碑は正平南海地震（1361）の津波の犠牲者の供養のために，その19年後の康暦（こ

うりやく）2年（1380）に建てられたものである。碑面にはこの綱三尾犠牲者と見られる60名ほどの戒名が印刻されている。

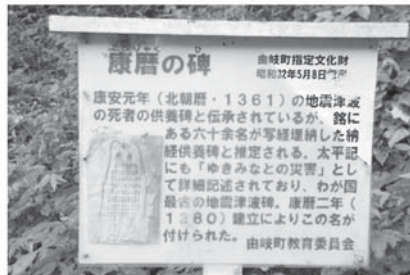


写真1 東由岐大池の南側斜面（図1参照）の「康暦（こうりやく）碑」（左）とその説明文（右）

### 3. 土佐国での津波の文献

#### 3.1 正興寺古文書の記載内容

土佐国（高知県）を含む四国の過半は江戸時代以前は長宗我部氏の領地であった。17世紀の初めに江戸幕府を頂点とする幕藩体制に移行すると、遠江国（静岡県西部）掛川の城主であった山内一豊に土佐一国を与えられ、明治維新に至るまで山内氏の支配するところとなった。このため、長宗我部氏の支配下で作成されたはずの記録のほとんどは失われた。当然、正平南海地震の記録も長宗我部氏の記録としては今日まったく残存していない。土佐国での正平地震津波の記録は、土佐国香美郡田村下庄の正興寺に関するもののみである。それではさっそくその史料を見ておこう。

『土佐国編年記略・三』（弘化2年、1845、中山巖水編）に載せられた土佐国香美郡田村下庄（現在南国市）の前浜正興寺の古文書である。次のように記されている。

土佐国田村下庄正興寺、  
院主職并供田井門（カ？）条十里西依、  
口合テ五段、放牧地、  
西条九里一町、同八反、

右件供田は、本寄進状者、康安元年（＝正平十六年、1361）六月廿四日、大塩之時、雖令紛失（以下略）

土佐国香美郡田村下庄にあった正興寺の院主職（寺の住職の地位）と、正興寺に寄進された供田三枚分、合計二町三反（約2.3ヘクタール）の寄進状が、康安元年（1361）六月二十四日の津波で流失した、という。寺へ寄進された田の寄進状というのは寺にとってもっとも重要な書類であるから、寺では厳重に保存されていたはずである。

#### 3.2 正興寺の移転の歴史

この正興寺文書の原記載にある、「香美郡田村下庄」というのは、現在の南国市田村から海岸沿いの前浜の地域で、江戸時代には下田村と呼ばれた所である。しかしながら現在ここには正興寺は現存しない。南国市教育委員会の三谷民雄氏に御教示いただいた、ここ

でこの文書の冒頭に記された正興寺の変遷を記しておこう。

#### 〔江戸時代の正興寺〕

明治四年（1871）に廃仏毀釈によって廃寺となる以前、江戸期には前浜村（現在南国市前浜）の中屋敷に京都山科の醍醐寺報恩院の末寺の正興寺があった。現在の南国市前浜の寺家（じけ）と久保の小字の間にあり、現在の天神社の北に隣接する竹藪であるという（山本信女史ご教示）。現在の高知空港のすぐ南の海岸の砂丘の北側の緩い勾配の上で、背後に後川の流れを控えている。しかし、これは江戸期の正興寺の位置であって、正平地震津波（1361）のころには正興寺はここにはなかった。



図2 南国市前浜（旧香美郡田村下庄）での正興寺の変遷

#### 〔中世・正平津波の頃の正興寺〕

南国市教育委員会の三谷民雄氏によれば、正平16年（1361）の正平南海地震津波があったとき正興寺は江戸期の位置より約1km北側（内陸部）の平野部の、下田村大安寺とよばれる小字にあった（「旧本堂寺宝生寺々史」）。

それが長宗我部元親（土佐支配は1562～1599）の支配のころ、下田村から前浜村寺家に移転し、これが明治四年（1871）まで続いたのである。ただ元禄期（の「元禄地弘帳」）には、正興寺が下田村にあった名残として下田村うちに小字名「正興寺領2石」があげられている。

それでは、中世（南北朝時代）の正平地震津波（1361）のころ正興寺のあった場所は今はどうなっているのであろう？実は、一見何の編変哲もない1枚の水田であって、「大寺」という小字名が付いている場所が、中世、正平年代に正興寺のあった場所であるという。この水田の現在の所有者は近藤 貢氏である。

### 3.3 中世正興寺の所在地、小字名・大寺の水田所有者・近藤 貢氏の証言

中世、すなわち正平地震の起きた当時正興寺のあった場所は、「大寺（おおてら）」という小字（こあざ）名の水田である。その所有

者、近藤 貢氏の面会し直接お話を伺うことが出来た。近藤氏のお話は、次の6点である。

- (1) 正興寺は長曾我部氏支配の頃には、現在の小字名・大寺と呼ばれる一枚の水田の場所にあったと伝えられている。
- (2) 正平16年（1361）の津波で、この寺域に海水が入ったということも伝えられている。
- (3) 当時の正興寺（現小字大寺の水田）から北200mにある住吉神社は、このときの津波で、神像が流れ付いたため、ここに神社を創建したものである。
- (4) 長宗我部氏時代に、正興寺は後川南方に移転し、江戸時代にはそこにあった。
- (5) 正興寺は明治4年（1871）に廃仏毀釈運動によって、廃寺となった。
- (6) 小字名・大寺の水田から耕作中に五輪塔や、墓標のような石碑がしばしば出土した。



図3 中世に正興寺のあった小字・「大寺」の南北2kmの範囲の詳細地図



写真 2 南国市・近藤 貢氏所有の小字名・大寺の水田から出土した五輪塔（左写真，右写真上方）と墓石（右写真）



写真 3 正平南海地震の津波によって神像が漂着したことにより開基されたと伝えられる住吉神社（図 3 参照）

#### 4. 津波浸水高の推定

以上の証言，地図，証拠写真から判明することを整理しておこう。

- (1) 『土佐国編年紀略・三』に載せられた，正興寺古文書に言う，院主職および土地の寄進証文のあった正興寺は，正平南海地震当時，現在の南国市前浜の小字名・大寺の近藤 貢氏所有水田の位置にあったという伝承が正しいことは，出土物の存在からほぼ疑う余地がない。
- (2) 「院主職と土地の寄進証文」は津波当時，この寺で保存されていたが，津波によって流された。古文書は少なくとも床上に置かれた書棚の中にあったはずである。一般民家では床面は敷地

の上約 70cm 上方にあるのが標準である。寺院ならもう少し高かった可能性がある。「寄進証文」は床面からさらに 30cm 上方にあったとすると，それは敷地の上方約 1.0m の位置にあったはずである。それが津波で「失われたのであるから」，正興寺の位置で，津波による海水は，小字名・大寺の地上面の上方約 1.0m までは浸水したと推定される。

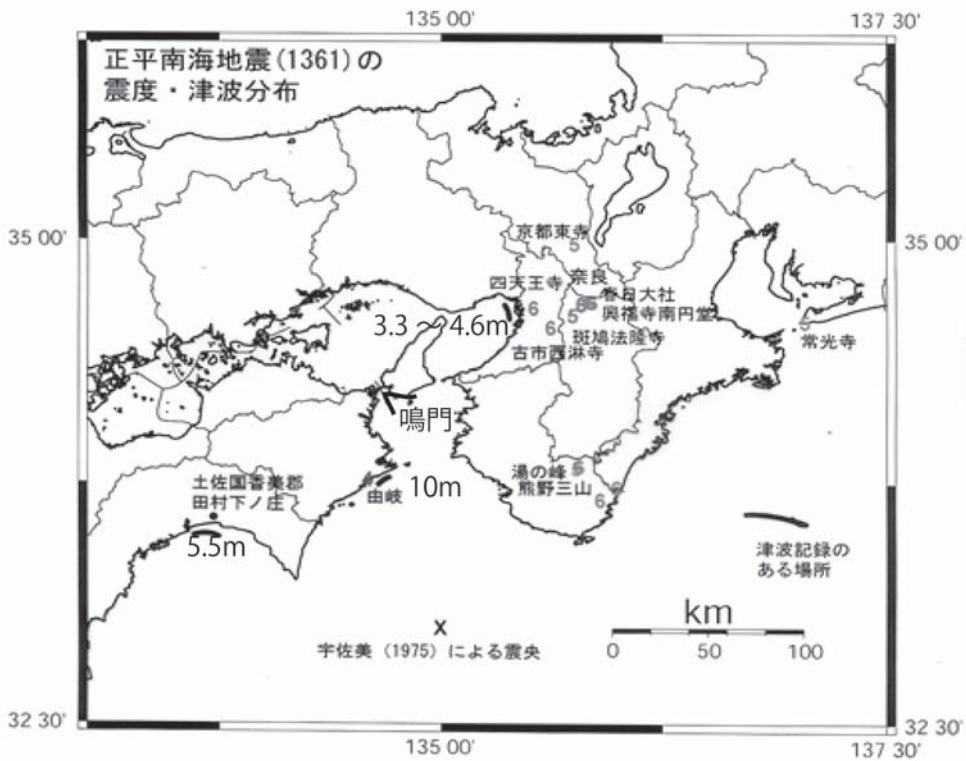
- (3) 現地測量結果によると，大寺の位置の標高は TP 4.5m である。位置は  $33^{\circ} 32' 32.79'' \text{ N}$ ,  $133^{\circ} 39' 39.52'' \text{ E}$  である。」ここで地上 1.0m まで冠水したのだから，ここでの津波浸水高さは 5.5m と推定する。
- (4) 海水は，小字名・大寺（正興寺）の位置からさらに約 200m 北方の，現在住吉神社のある点まで到達した。その場所の標高は 4.8m であるが，この値をここでの津波遡上高とする。位置は  $33^{\circ} 32' 39.55'' \text{ N}$ ,  $133^{\circ} 39' 41.14'' \text{ E}$  である。
- (5) (3) と (4) で津波高さに約 70cm の差があるが，これはそれぞれの位置で正しい数値であろう。
- (6) この場所は，これ以後に起きた 4～5 回の南海地震が起きるたび毎に地盤が沈下し続けているはずである。地震の直後には約 1m 沈下してもその約半分は本震後約 2 年間の非地震的な回復隆起によって，その半分の約 0.5m は

隆起し、けっきょく残りの半分である50cm分は永年沈下として残ってしまう。昭和南海地震（1954）、安政南海地震（1854）、宝永地震（1707）、それに明応南海地震によってもこの程度沈下したとすると、この地域は永年的に約1.5m沈下していることになる。従って、この補正を行うと明応地震による真の津波遡上高さは宝永地震で約1.5mとす

る。われわれの測定値驗潮高さは、5.5mより大となることが予想される。しかし、この補正は今は行わないことにする。

## 5. 総括

正平南海地震（1361）の各地の震度、および津波高さの総括図を図4に示す。



## 6. 謝辞

この研究を進めるに当たり、南国市教育委員会の三谷民雄氏、山本信氏、および同市前浜にお住まいの近藤 貢氏の各位には貴重なお教えを頂いた。記して感謝の意を表したい。

## 参考文献

平凡社，1983，「日本歴史地名大系第40巻 高知県の地名」，pp755

武者金吉（編），1941，「増訂大日本地震史料 第1巻」，文部省震災予防評議会，pp943  
長尾 武，2013，正平（康安）地震（1361）による大阪での津波遡上高，歴史地震，28，121-128  
東京大学地震研究所，1981，「新収 日本地震史料 第1巻」，pp193  
東京大学地震研究所，1989，「新収 日本地震史料 補遺編」，pp1203  
都司嘉宣，1999，南海地震とそれに伴う津波，月刊地球，号外24，36-49

---

都司嘉宣, 矢沼 隆, 細川和弘, 岡部隆宏,  
堀池泰三, 小網汪世, 2013, 明応東海地震  
(1498) による静岡県沿岸の津波被害, お  
よび浸水高について, 津波工学研究, 30,  
123-141